

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Anna Moroz (アンナ・モロズ) (ロシア)
- (2) 年 齢 : 35 歳
- (3) 参加事業 : 平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」参加青年 (※SWY28相当) (2015年度)
- (4) 職 業 : エドテック企業「Careerist」(アメリカ合衆国) 編集長



■ 参加のきっかけ

日本語の先生から、「世界青年の船」事業（以下「世界船」という。）への参加を勧められたことがきっかけで、応募しました。私はもともとボランティア活動に積極的に参加したり、日本人のペンパルとの文通をしていたので、この事業は面白そうだと思いました。当時、私はすでに大学を卒業し、マーケティング会社で働いていましたが、この素晴らしい機会を逃すわけにはいけないと思いました。ロシアでは地域ごとに選考が行われており、私の地域では2つの日本関連機関で募集の告知がされ、領事館での面接を受けました。

■ プログラムに対してどのような期待がありましたか。

世界船が「教育プログラム」だということは想像していましたが、リアルな異文化コミュニケーションや、リーダーシップを学べるとは思っていませんでした。教育プログラムは、世の中に溢れており、オンラインでもオフラインでもいくつも開講されています。しかし世界船は、教育は全てのプログラムのベースになっており、学習に加えて学習する前や、学習した後も、さらに学びがあるという感じでした。応募の時点では、世界船での経験が**私の人生にとってどれほど重要なものになるかは想像もつきませんでした**。私はもともとボランティア活動に積極的に取り組んでいましたが、それは単に「面白そうだからやる、私に関心を持つことは、みんなも関心があるだろう」というくらいの気持ちで行動に移していただけで、やったことでの結果や影響を考えることはありませんでした。それが、世界船で出合う「デザイン思考」という考え方（後述）によって、エンドユーザー（受け手、受益者）に思いを馳せ、何かを始める時に「**誰に向けてやるのか**」をきちんと考えるようになったのです。これは社会活動でも、仕事においてもそうで、全てのことにおいて視点が変わりました。

■ 家族と呼べる仲間によって、小さくなった世界

世界船は、私にとっては「お料理する鍋」のようなものです。鍋に人参を入れてスープを作るように、教育、コミュニケーション、友情など、いろいろなものがスープに入ると、スープは特別な味になります。まず、私が所属するロシア代表団の11人が、家族と呼べるほど近い存在になるとは、思いませんでした。外の世界がとても小さく、個人的なものとなりました。参加国の中には、聞いたことはあってもこれまで全く馴染みのない国もありました。地図上のどこかにある国というだけで、どんな人が、どんな宗教や生活習慣を持って、暮らしているのかはこれまで知りませんでした。国も文化も背景も違う私たちが、船の中で一緒に暮らしたことは、日々新しいことを学ぶ、興味深い体験でした。世界で何か起こるたびに、世界船ファミリーのことがとても心配になるとは思っていませんでした。また、世界中の人々が私に会うことを喜んでくれるとは思っていませんでした。そして、私が世界船関連イベントに参加することで、常に増え続ける世界船ファミリーに会うことが、こんなにも幸せなことだとは思っていませんでした。



第 28 回世界船でのロシア代表团（筆者前列中央）

世界船のある瞬間において、「**私は世界を身近に感じることができる**」と思いました。これまでの世界の認識は、とてつもなく大きく、人がたくさんいて、たくさんの地域があって、という感じでした。それが世界船により、**世界は小さく、そしてパーソナルなもの**に感じられました。例えば数年前に、スリランカのコロンボで襲撃事件がありましたが、それは 12 名の参加青年を知っている私にとってパーソナルなものですから、すぐに連絡を取って安否を確認しました。日本で地震が起きても同様に、多くの友人の安否を気にすることになります。世界船の他の回の方ともすぐにつながれるのは、兄弟姉妹のように育った友人がいて、最終日の同じ別れの体験をしている、そういった共通体験にも由来すると思います。そして、その大切なつながりを感じるためにも、事後活動をするのです。

■テクノロジーに頼らずゼロから企画

自分のソフトスキルを磨くことは非常に有益でした。世界中の人々とコミュニケーションを取る方法、プレゼンテーションの方法、人どうし交わり、個々人のストーリーや感情、芸術を通して接するかを学びました。また、プロジェクトやプレゼンテーションを**ゼロから立ち上げる方法**も学びました。インターネットやプリンター、デジタルの世界にも慣れている私たちですが、船上には私と私の頭しかありませんから、かなりの挑戦であり、ハツとするものでもありました。私たちはパソコンの前でネット検索するというのに慣れすぎていますが、やってみて分かったのは、**自分の頭と、紙とペン、そして相談できるよき仲間がいれば、物事は成し遂げられる**ということでした。よき仲間というのは、よき人生の経験、コミュニティの経験を持っているものです。一つの例として、参加当時、私は野良犬の問題に興味があり、地元のコミュニティで動物保護活動の団体の立ち上げを経験していました。世界船内でも、野良犬問題についてどのように対応すべきか仲間と相談し、そのときに出た案を踏まえて参加後に「児童向け情報センター」を立ち上げました。動物との信頼関係や態度は、幼少の時に形成されます。そこで仲間と「野良犬に出くわしたら、どうしたらいいか」「動物はどのように扱われるべきか」「野良犬に粗野な行動をとっている人を見たら、どう声をかけたらいいか」などの情報発信をすることを考えました。野良犬は一般的に、一般家庭でペットとして飼われていたのに捨てられてしまったというケースが多いため、私たちは学校へ赴き、対応捨てられる前と後の犬の状態を、写真で見せたりします。この活動は、方向性として正しく実施できていると思います。

すでに社会人経験がある中で、さらに学んだのはどんなことでしたか。

私の物語が、他の誰とも少し違った理由として、私は参加時に 29 歳だったことがあげられます。相当年数の社会人経験もありましたし、経験則に基づいて、こうやったらうまく行く、こうやったらうまく行かない、ということも分かっていました。そして、このプログラムを通じて私は、私よりずっと若い人たち、つまり 18 歳以上の、**世界をより良く変えたいと夢を抱く人**たちを、よく理解できるようになりました。彼らは、心を開き、何かに情熱を持ち、そして「うまく行かないかもしれない」ということには気付いていません。そして、彼らと話すと、自分がいかに「小さなコミュニティで、小さな範囲でしか考えておらず、大きなアイデアを持っていない」かに気付かされたのです。そして、「**世界共通で人々が享受できること**」に、より考えが及ぶようになりました。現実的な世界から、理想の世界を考えられるようになりました。そして、自分の培ってきた経験すらも、自分で「（これは失敗するから）できない」という理由を作ってしまうことになり得るのだと知りました。

また、プレゼンテーションの中でも有益だったのは、既参加青年それぞれの**母国の紹介をする時に、負の部分もきちんと伝えていた**ことです。どの国も多くの矛盾を抱えていることを知れたのが、大変貴重でした。汚職や医療問題など、負の部分を共有してくれた国には、とても共感を覚えましたし、痛みも共有しました。というのもその問題は自分の国にも当てはまると思ったからです。



ナショナル・プレゼンテーションでロシアのドラムを披露（筆者右）

■コミュニケーション力の向上

私は海外留学をしたことがないので、世界船と他の経験を比較するのは、判断に迷うところです。実際は、一日中英語を話すことも問題なく、世界中の人ととても快適に過ごせることがわかりました。世界船の中では、ツールとして英語を活用することができ、どんな年齢や国籍の相手とも、自分はやっていける、と確信しました。今までそのような経験がなかったため、驚きでした。その結果、私は転職して国際的な企業に就職し、以前よりはるかに多くの収入を得られるようになりました。自分に自信が持てるようになりました。今では毎日、世界船で培われたコミュニケーションスキルや、英語力を使っています。

私たちは皆、国籍や使用している言語にかかわらず、大切にされたい、信頼されたい、など共通点が多いでしょう。ですから、**仕事の成功には、良いコミュニケーションが取れることが鍵**だと思います。また、世界船では英語を母国語としない青年も多くおり、各国の英語の発音を聞くことができました。学校で習ったようなイギリス英語やアメリカ英語を話す人ばかり

りではなく、各国で英語の発音も様々なので、今の仕事ではあらゆる国の人の話を聞き取るのにも役立っています。もちろん、**世界の問題をより深く理解し、よりグローバルに考えられるようにもなりました。**世界船に参加する前は、**自分の住んでいる地域社会しか考えていませんでしたが、今は自分の周りに起きるもっと様々なことを見ることができています。**

■ 自分の殻を破った出来事

船上では、船という閉ざされた空間で、インターネットも、自分の国も、家族にも連絡することはできません。そして**みんなと対等であり、プログラムの目的に集中し、自分の能力と努力次第でどんなことでも体験できます。**このユニークな環境は、閉ざされた環境（船、列車、飛行機など）でのみ起こります。**青年一人ひとりが、自分自身について多くの新しい発見をします。自分の良い面も悪い面も見えてくるからです。**私は自分の性格について多くを発見しましたが、そのうちの一つは私の人生を大きく変えることになりました。船の上では、たくさんの人が私に「あなたはフレンドリーでいい人ですね」と声をかけてくれましたが、私はこれまで自分をフレンドリーな人とは思っていませんでした。世界船で私にとって価値があったのは、教育的に何かを学んだり、何かができるようになったりということよりも、「あなたにはこんないいところがあるよ」と友人たちが教えてくれたことでした。

プログラム開始当初、周りの青年たちは私より年齢が若く、学びに対して興味津々という感じでしたが、私にとっては目的を見つけること自体が挑戦でした。というのも、私はすでに結婚していて娘がおり、複数の仕事を経験していたので、18歳の大学生という、人生をまだ知らない子たちとどうコミュニケーションを取ったらいいのかと、迷いがありました。私は、夜遅くまでパーティをしたり、星を見たり、はしゃいだりするよりも、きちんと睡眠を取る方を選びましたし、その選択をするゆえの寂しさもありました。それゆえ、何が起きているの、私は関心ないわ、と上から目線になっていたこともあったかもしれません。しかしそんな私を変えたのが、メキシコの青年との出来事でした。ミュージシャンでもあった彼は、コミュニケーションも上手で、私が苦手意識を感じていた若い青年たちとも、うまくやり取りしていました。私はどちらかと言えば若い青年たちを避けることで、自分を守っていたように思います。ある日、このメキシコ青年がピアノを弾いていて、周りにたくさんの青年がいました。そこを通りかかった時に、「アンナ、こっちへ来て。一緒に歌おう」と誘ってくれました。このメキシコ青年とはこれまで接点がなかったのですが、曲を弾いてくれるというので、私はロシア語の曲を歌いました。他の言語で歌える余裕はありませんでした。曲が終わると、「アンナ、素晴らしいかったよ。今の歌詞を、紙に書いてくれないか」と言われ、ロシア語の意味を書くと、「じゃあこれをスペイン語にするよ」と彼がスペイン語での歌詞をつけ、次は一緒に歌ったのです。これは魔法のような瞬間でした。その時分かったのは、「**これまでのように、自分の殻に閉じこもってしまったら、こんな素晴らしい瞬間には出会えない**」ということでした。そこからの私は変容し、「分かるように努めよう、自分から一歩踏み出して、コミュニケーションを取る努力をしよう、態度を変えよう」と、私の全てが変わったのです。今でも、このメキシコ青年とは連絡を取り合っていて、よい関係性が築けています。

■ 寄港地活動で得られた気づき

ワークショップへの参加や、寄港地での施設訪問は、とても重要でした。プロジェクト・マネジメントの理論と実践を目の当たりにし、「このプロジェクトは本当に必要とされているか？」を理解するのに役立ちました。それまでは、エンドユーザー（受益者）のことを考えず、彼らが何を望んでいるか、何が必要かを自分はよく知っていると思っていました。デザイン思考のワークショップや施設訪問からの学びにより、人の頭の中のアイデアからエンドユーザーまでの道筋を組み立てられるようになったことが、大変素晴らしかったです。寄港地活動においては、インドの女性精神疾患センターへの施設訪問が印象に残っています。これは、プロジェクト・マネジメントとデザイン思考を学んだ「地域開発（Community Development）」というコース・ディスカッション内のプログラムの一つでした。特定のグループに対する**ソーシャルワーク**と、

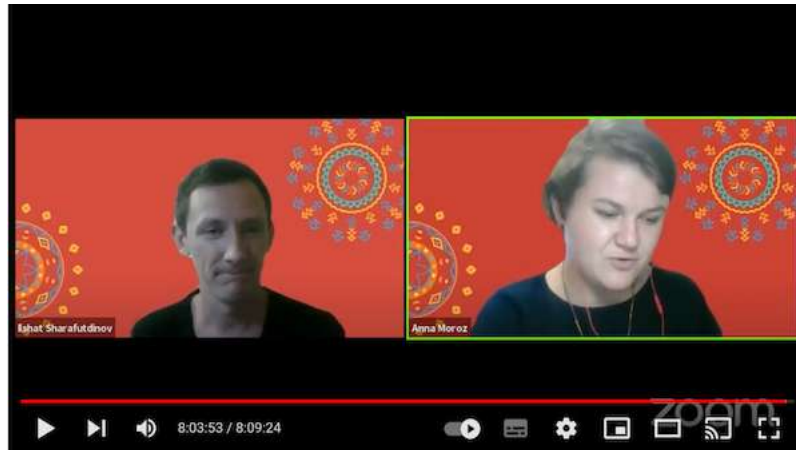
目標達成に近づくための**デザイン思考アプローチ**が、いかに重要かを目の当たりにし、大きな影響を受けました。このセンターは民間企業で、精神疾患を持つ女性がいかに弱い立場にあるかを知った熱意ある人々により設立されたものです。このセンターは、彼女たちを支援し、宿泊と食事を提供し、仕事を始められるよう支援しています。このセンターでは、社会的弱者の住むコミュニティを対象としていましたので、金銭的にも貧しく、コミュニティ内にも助ける手立てがないという印象でした。デザイン思考のアプローチは、このコミュニティを変容、分断、解体などさせることなく、シンプルに女性たちに寝場所と手仕事をする機会を提供していました。そうやって女性たちが家族や親戚、社会に簡単に貢献できる方法を作ったのです。デザイン思考が変えようとしたことは、「貧困地域で精神疾患を持った女性は、生計を立てる手段がない」ということのみでした。彼女たちが住んでいる環境は、一切変えることなく、これを実現したのです。

■ 事後活動組織の活動

私は世界船に関するボランティア活動に深く関わっています。世界青年の船事後活動組織ロシアの副会長として広報を担当し、世界船の活動に積極的に参加しています。世界船オンライン事業のロシア代表団の申込と選考、そして準備に関わりました。施設を訪問し、ライブストリーミングやプレスリリース、ソーシャルメディアへの投稿を通して、世界船の重要性についてオンラインで発信しました。その際、ロシア代表団の友人たちが手伝ってくれました。新型コロナウイルス拡大前は、対面活動を活発にしており、事後活動組織ロシアの大きなイベントとしては 2014 年と 2017 年、「**RuSWY Train**」（ロシア版・世界青年の汽車）を実施しました。モスクワからウラジオストクまでを 2 週間、鉄道で移動し、途中でカザンやノヴォシビルスクに立ち寄ります。車窓からの風景を楽しんでもらったり、風光明媚な場所を観光したりします。そしてロシアには宗教の多様性がありますから、モスクワやサンクト・ペテルブルグではロシア正教の教会、カザンはイスラム教の都市なのでモスクがあり、東側では仏教の建築なども見られます。このイベントは、過去に 2 回実施しましたので、3 回目をやりたいと思っています。そして世界青年の船事後活動組織**国際大会**も、直近はモスクワで開催しましたので、そのような対面活動がありました。オンライン活動としては、バーレーンと協力して、「**SWY Bake Day**」（オンラインのクッキングクラス）をしたりしました。他国の事後活動組織とも協力して活動ができるよう、オーストラリアやカナダの仲間と連絡を取っています。**一国の組織ではあまりグローバルなことができませんから、連携できるようにしています。**

最近実施した活動には、どんなものがありましたか。

私は「少数民族」のトピックにとっても興味があり、私が発案者として仲間に声をかけ、世界船事後活動組織ロシアとして「**少数民族**」会議を開催することとなりました。2021 年 8 月に、7 時間にわたるオンライン会議を開催し、11 カ国から 13 人のスピーカーを集めました。インド、フィリピン、マレーシア、ケニア、スリランカ、エジプト、ロシア、オーストラリア、最後はメキシコ、チリ、ペルーまで、少数民族とその問題について当事者から話を聞きました。東南アジアからの参加国は、「東南アジア青年の船」事業の既参加青年で同じ内閣府の事業の出身者です。**視聴者は 1,000 人**ほど集まり、YouTube で質問を取ることもしました。私は裏方で、Zoom 上でのスピーカーの登壇準備などをしていたので、発起人にも関わらず本番はほとんど見られないほどバタバタしていたのですが、成功裏に終わりとても充実感を覚えました。今年は、この会議をまとめた刊行物の発行と、第 2 回国際少数民族会議の開催を、コーディネートする予定です。



国際少数民族会議での筆者（右）

世界船という事業は、**世界を変えたいと思う人たちにとって素晴らしいツール**であるため、世界船についての情報を共有することが大切であると学びました。世界船は、単に教育・文化理解事業を行う「船」ではなく、**グローバルにポジティブな変化を生み出そうという考えで団結した人々の巨大なネットワーク**なのです。どんな変化も一人では決してできませんが、このネットワークのサポートがあれば、どんなことにも手が届くでしょう。国際プログラム、寄付週間、経験の共有、意識啓発など、さまざまな活動を行うことができます。3人集まれば文殊の知恵と言いますし、賢い頭がたくさんあれば、それは素晴らしいことです。

■ 世界船の仲間がいる日常

第28回の仲間や、出会った他の回生とは、今でも連絡を取り合っています。私はメキシコを訪れ、友人に会い、そしてこの素晴らしい国についてもっと知ることができました。日本も再訪し、世界船の管理部やスタッフとして再乗船する素晴らしい友人たちを、オープンシップで見送ったりもしました。私は世界船ファミリーとは物理的に遠く離れていますが、ほぼ毎日連絡を取り合っています。だからこそ、私は世界船事後活動組織ロシアでの副会長としての活動もできるのです。私は世界船が**世代を超えて引き継がれる贈り物**だと思っており、**できるだけ長く続くべきもの**であると考えています。事後活動としては、地域に還元できることはもちろんですが、私たち世界船の「結束」（ユニティ）を示せるような活動が良いと思います。

アンナ・モローズ氏のプロフィール

日本語に情熱を持つ傍ら、マーケティング・スペシャリストとして勤務の後、2016年に平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」（※SWY28相当）に参加。事業終了後、2017年に石油・ガスのグローバル企業でキャリアを積み、現在はアメリカ合衆国のエドテック企業「Careerist」のコンテンツ部門責任者である編集長を務める。様々なボランティア活動に加え、現在は世界青年の船事後活動組織ロシアの副会長を務める。事後活動組織の活動の中としては、11カ国から既参加青年が集まり、「世界の先住民の国際デー」にちなんだ初のオンライン国際会議を開催した。